

# 琉球大学学術リポジトリ

## 目標達成が困難な状況への対処方法と心理的なWell-Beingとの関係

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部 公開日: 2007-08-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 竹村, 明子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/1419">http://hdl.handle.net/20.500.12000/1419</a>

# 目標達成が困難な状況への対処方法と心理的Well-Beingとの関係

竹村明子\*

The relationship between coping and psychological well-being

when faced with difficulty in achieving a personal goal.

Akiko Takemura\*

This study examined the relationship between two types of coping strategies (goal tenacity and goal flexibility) and five dimensions of psychological well-being (personal growth, purpose in life, environmental mastery, self-acceptance, and positive relations with others). Two hundred and ninety-five nursing school students (52 men and 243 women) evaluated their psychological well-being as well as their goal tenacity and flexibility toward their personal goal in case they face obstacles against the goal. Structural equation modeling revealed that goal tenacity greatly facilitated a sense of personal growth while goal flexibility greatly improved self-acceptance and a sense of mastery over environment. The analyses also revealed that both coping strategies weakly but significantly enhanced purpose of life and positive relations with others.

## 背景と目的

人生の目標を妨げるような出来事に直面した時、人はそれをどう乗り越えていくのだろうか。そしてその乗り越え方の違いは、個人の心理に異なる影響を与えていくのだろうか。

生涯発達心理学の分野では、人生で出会う困難に対して、個人はどのような対処するのかということが、重要な研究対象の一つとなっている (Morling & Evered, 2006)。特に、対処方略が個人の発達や心理的健康に及ぼす影響に注目が集まっている。例えば、高齢になり身体が思うように動かなくなった時には、老いを受け入れ、周りにサポートを頼むことが、心理的健康の維持に貢献することが報告されている (Aldwin, Sutton, Chiara, & Spiro, 1996)。また、不妊治療を続

けている女性の場合、妊娠可能性が高い30代の女性は、不妊治療にさらに努力を注ぐほど心理的健康が高いのに対して、妊娠可能性が低下した40代および50代の女性では、不妊治療を諦めることが心理的健康を高めることが明らかとなっている (Heckhausen, Wrosch, & Fleeson, 2001)。

これらの研究により、単に対処可能なことが心理的健康に貢献するのではなく、用いる対処方略の違いにより心理に与える影響が異なることが示唆されてきた。そのため最近では、対処方略を複数に分類して検討した報告が増えている。

## Dual Process Model

そのうち、Brandtstädter と彼の同僚 (Brandtstädter & Renner, 1990; Brandtstädter & Rothermund, 1999; 2002) は、対処方略を二

\* 琉球大学非常勤講師

つに分類したモデル、Dual Process Model を提唱している。一つ目の対処は、困難な状況でも諦めずに目標に近づくために個人資源（時間やエネルギーなど）を投入する対処方略であり、Assimilative Coping と呼ばれる。二つ目の対処は、現在の状況を受容し目標達成のレベルを下げたり計画を変更したりして目標を調整する対処であり、Accommodative Coping と呼ばれる。Brandtstädter & Renner (1990) は、これらの対処概念を基に、Assimilative Coping を測定する目標不屈追及 (Tenacious Goal Pursuit: TGP) 尺度と、Accommodative Coping を測定する目標柔軟調整 (Flexible Goal Adjustment: FGA) 尺度を作成している。そして、両尺度の得点が高いほど、目標達成が妨げられる状況においても、個人の内的統制感が高く、心理的に健康で、Well-Being が高いことを確認している。さらに、34～63歳を対象に対処方略の加齢変化を調べた結果、年齢が高くなるほど目標不屈追求尺度の得点は低下するのに対して、目標柔軟調整尺度の得点は高くなることを見出している。これらの結果より、彼らは、目標柔軟調整が高くなることは発達と捉えられることを示唆したのである。従来、目標達成が妨げられる状況で、目標レベルを引き下げることや、単に認知を切り替えるだけの対処は、直接に問題を解決しないため、心理的健康に負の影響を与えると捉えられていた。これに対して、彼らは、柔軟に目標を調整することも、心理的健康に肯定的影響を与えること、これを発達の一つと捉えられることを、実証的に明らかにした。この点で、彼らのモデルは注目に値する (Morling & Evered, 2006)。

しかし先行する研究では、目標不屈追求が心理的健康に与える影響と、目標柔軟調整が心理的健康に与える影響に、違いがあるのかどうかに関する検討を行っていない。両対処がなぜ心理的健康に効果があるのかということを明らかにするためには、両対処と心理的健康との関係の違いについて調べる必要がある。そこで本研究は、目標不屈追求と目標柔軟調整が心理的健康に与える影響の違いを明らかにすることを主な目的とする。

### 心理的健康の複数の次元

対処方略の違いが、心理的健康に異なる影響を与えていることを明らかにするためには、先ず心理的健康を複数の次元で捉える必要がある。Ryff と彼女の同僚 (Ryff & Keyes, 1995) は、心理的健康を複数の次元に分けて捉えた心理的 Well-Being という概念を提唱している。彼らは、Well-Being を「人格的成長」「人生における目的」「自立性」「環境制御力」「自己受容」「積極的な他者関係 (以下、他者関係)」の6次元に分け、これらの概念に基づいて尺度化を試みている。そして、心理的 Well-Being の次元により発達的変化のパターンが異なることを確認している (Ryff & Keyes, 1995; 西田, 2000)。このうち、「人格的成長」は、“発達と可能性の連続上において、新しい経験に向け開かれている感覚”を表し、自分自身が進歩していることを感じている状態を指す。「人生における目的」は、“人生における目的と方向性の感覚”を表し、人生の目標や意味を見出している状態を指す。「環境制御力」は、“複雑な周囲の環境を統制できる有能さの感覚”を表し、自分の周囲にある機会を効果的に使って、複雑な状況を統制していると感じている状態を指す。「自己受容」は、“自己に対する積極的な感覚”を表し、良い面、悪い面を含む自己の多側面を認めて受け入れている状態を指す。「他者関係」は、“暖かく、信頼できる他者関係を築いているという感覚”を表し、他者との間の愛情、親密さ、共感を感じている状態を指す。Ryff & Keyes (1995) によれば、心理的 Well-Being のこれらの次元は、困難な状況への挑戦による成長、発達の心理的様相を示す概念であるという。さらに、次元ごとに発達変化が異なり、年齢が高くなるほど人格的成長の次元は低下する一方で、その他の次元は高くなることが明らかとなっている。

このような心理的 Well-Being の概念は、目標不屈追求と目標柔軟調整が心理的健康に与える影響の違いを明らかにするために、適するものであると考えられる。そこで、本研究では、目標不屈追求および目標柔軟調整と心理的 Well-Being の各次元との関係について調べることを具体的な目的とする。

本研究の目的と仮説

本研究では、目標不屈追求と目標柔軟調整が心理的 Well-Being の各次元に与える影響の違いを明らかにするために、因果モデルを構築し、共分散構造分析を用いて検討を試みる。共分散構造分析を用いることのメリットとして、因果の大きさ、強さの推定、検定ができること、調査項目をまとめて単純化（潜在変数化）してから因果関係を調べることがあげられる（山本, 1999）。本研究の目的には、このような特徴を持つ共分散構造分析が適切であると判断する。

そこでまず、Figure. 1に記載した通りの因果モデルを構築した。因果モデル設定において、外生変数（独立変数）として対処方略の2次元（目標不屈追求および目標柔軟調整）を、内生変数（従属変数）として心理的 Well-Being の5次元（人格的成長・人生における目的・環境制御力・自己受容・他者関係）を設定する。そして対処方略の2次元から各心理的 Well-Being の5次元へのすべてのパスを設定し、共分散構造分析を用いて最も適するモデルを探索する。

次に、本研究により予想される仮説について述べる。まず目標不屈追求に関して、目標達成が困難な状況でもさらに努力を続けようとする時、人はその意味や目的を問い直す機会を得る。よって、不屈に目標を目指すほど、人生の目標や目的が明確になり、心理的 Well-Being のうち人生の目的が高くなると予想される（仮説1）。次に、目標柔軟調整に関して、目標達成が困難な状況においても、状況の明るい側面を見つけ出したり、新たな方法を模索することは、自己や状況の受容を高め、周囲にある資源（時間やエネルギー）を効果的に使う傾向を高める考えられる。よって、目標柔軟調整が高いほど、自己受容および環境制御力が高いと予想される（仮説2）。

方 法

調査協力者と手続き

看護師資格取得という目標を持つ沖縄県内の看護学校生、1年生97名（うち男性  $n = 20$ ）、2年生97名（うち男性  $n = 23$ ）、3年生101名（うち男性  $n = 9$ ）を対象に質問紙調査を2006年の

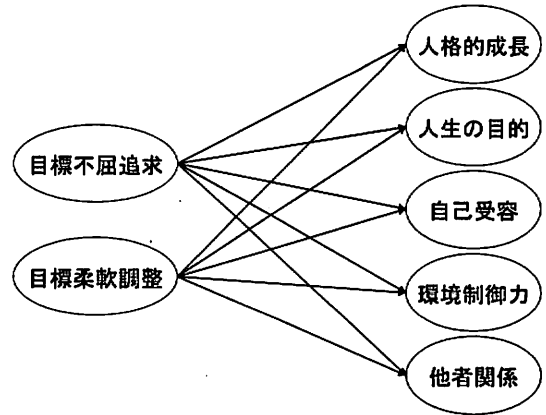


Figure 1. 目標不屈追求および目標柔軟調整と5次元の心理的Well-Beingとの因果モデル

7月下旬（前学期の修了時）に行った。調査時において執筆者が調査目的を説明し、その場で回答を求め回収を行った。所要時間は個人により異なり、10～30分程度であった。

調査項目

目標不屈追求と目標柔軟調整尺度 TGP & FGA 尺度 (Brandtstädter & Renner, 1990) を参考に、Table 1に示した通りの目標不屈追求6項目と目標柔軟調整6項目を作成し用いた。調査時において「あなたは現在、看護師資格取得を目標に勉強を続けていると思います。目標達成が困難な状況に出会ったとき、次の項目はあなたにどのくらいあてはまりますか」という質問を口頭で行い、各項目について5段階（-2 = 「全然そう思わない」、0 = 「どちらでもない」、2 = 「まったくそう思う」）で評定を求め、分析時において0～4点になるよう得点化した。

心理的Well-Being尺度 Ryff & Keyes (1995) を参考に西田(2000)が作成した心理的Well-being 尺度のうち5下位尺度 (a. 人格的成長, b. 人生における目的, c. 自己受容, d. 環境制御力, e. 他者関係) を用いた。各下位尺度は5項目で構成されており、合計25項目を6段階（6 = 「非常にあてはまる」、1 = 「まったくあてはまらない」）で評定するよう求めた。各項目の例は、Table 4に示している。各下位尺度について項目の粗点を合計したものを項目数で割ったものを、各下位尺度

Table 1. 目標不屈追求と目標柔軟調整尺度の因子分析結果 (プロマックス回転)

		F1	F2	共通性
[ 目標不屈追求 $\alpha=.75$ ]				
TGP1	どんなに大変な困難に出会っても、決めた目標や計画を遂行し続ける	.669	.109	.51
TGP2	状況が最悪だとしても、目標達成にむけ努力する	.661	.074	.41
TGP3	障害に出会ったときは、障害を乗り越えるために2倍努力する	.603	-.061	.34
TGP4	希望が持てないような状況でも、目標に向け努力する	.586	-.224	.37
TGP5	私は目標を達成することに固執する方だ	.567	.098	.30
TGP6	達成するのが大変な目標ほど、魅力的に見える	.476	-.008	.22
[ 目標柔軟調整 $\alpha=.67$ ]				
FGA1	大きな障害の後でも、すぐ新しい課題に切り替えることができる	-.012	.686	.46
FGA2	すべての物事が悪い方向へ行くように見えるときでも、その状況を楽観的にみることができる	-.024	.631	.39
FGA3	計画の変更や環境の変化に容易についていくことができる	.002	.531	.28
FGA4	私は逃した機会について、いつまでも気に病むことはない	.039	.451	.22
FGA5	重大な障害に直面した時は、その状況から抜け出す手段を考え出すことができる	-.133	.445	.17
FGA6	ある目標に失望したときには、他にも大切な目標があるじゃないかと自分に言い聞かせることができる	.131	.332	.16
		回転後の固有値の合計	2.335	2.014
		因子間相関	.368	

Table 2 学年別各変数の平均値 (標準偏差) と一元配置分散分析結果

	1年生 平均値	2年生 平均値	3年生 平均値	F 値	
目標不屈追求	2.67 (.67)	2.58 (.51)	2.34 (.56)	7.91***	1,2年生>3年生
目標柔軟調整	2.18 (.66)	2.06 (.68)	2.12 (.53)	.92	
人格的成長	5.40 (.56)	5.38 (.53)	5.19 (.64)	3.81*	1,2年生>3年生
人生の目的	4.49 (.99)	4.35 (1.05)	4.41 (.87)	.47	
自己受容	3.47 (1.07)	3.40 (1.03)	3.50 (.84)	.31	
環境制御力	3.98 (.75)	3.83 (.69)	3.89 (.58)	1.25	
他者関係	4.71 (.77)	4.60 (.77)	4.53 (.72)	1.36	

\*  $p < .05$ , \*\*\* $p < .001$

注. ( ) 内は標準偏差

の得点として算出し、分析に用いた。

### 結 果

本研究の分析には、SPSS14.0並びにAMOS4.0を使用した。

#### 目標不屈追求・目標柔軟調整尺度の構成

目標不屈追求・目標柔軟調整尺度を作成するために、各項目の粗点に基づいて因子分析(主因子法、プロマックス回転)を行った。その結果とCronbachの $\alpha$ 係数をTable 1に示した。想定した通り、第1因子には目標不屈追求の項目が、第2因子には目標柔軟調整の項目が抽出された。Cronbachの $\alpha$ 係数は、目標不屈追求尺度が

$\alpha = .75$ 、目標柔軟調整尺度が $\alpha = .67$ であり、低い値であった。想定した通りの項目が抽出されたこと、信頼性係数の値は低いものの分析に耐えられる範囲であると考え、本尺度はある程度の信頼性があると判断した。各尺度について項目の粗点を合計し項目数で割ったものを各尺度の得点として算出し、以後の分析に用いた。

目標不屈追求および目標柔軟調整、心理的Well-being(人格的成長・人生の目的・自己受容・環境制御力・他者関係)について、性・学年別に平均値と標準偏差を算出し、2元配置分散分析を行ったところ、学年の主効果が有意であり、性の主効果および交互作用は見出されなかった。そこで、あらためて学年別の平均値と標準偏差を算出し、1元配置分散分析を行い、その結果をTable 2に

示した。その結果、目標不屈追求 ( $F(2,288)=7.91, p<.001$ ) および人格的成長 ( $F(2,288)=3.81, p<.05$ ) において有意な値が見出された。多重検定 (Tukey法) を行った結果、目標不屈追求において1・2年生 ( $M=2.67; M=2.58$ ) は3年生 ( $M=2.34$ ) より有意に高く、人格的成長において1・2年生 ( $M=5.40; M=5.38$ ) は3年生 ( $M=5.19$ ) より有意に高いことがわかった。その他の変数には、学年による差は見出されなかった。

次に各尺度間の相関係数を算出し、Table 3に示した。その結果、まず、目標不屈追求と目標柔軟調整との間に有意な正の相関 ( $r=.25, p<.001$ ) が見出された。次に、目標不屈追求と心理的Well-being 5次元の関係において、自己受容を除く、すべての尺度との間に有意な正の相関 ( $r_s=.28-.44, p<.001$ ) が見出された。そして、目標柔軟調整と心理的 Well-being 5次元の関係において、目標柔軟調整はすべての尺度との間に有意な正の相関 ( $r_s=.22-.53, p<.001$ ) が見出された。目標不屈追求と目標柔軟調整との相関に関して、Brandtstädter & Renner (1990) は独立していると述べているものの、松岡 (2006) は正の相関があることを見出している。本研究で2変数間に正の相関が見出されたことは、松岡 (2006) の結果と一致する。

Table 3 各尺度間の相関係数

	①	②	③	④	⑤	⑥
①目標不屈追求	—					
②目標柔軟調整	.25***	—				
③人格的成長	.44***	.22***	—			
④人生の目的	.35***	.28***	.42***	—		
⑤自己受容	.10	.48***	.20***	.39***	—	
⑥環境制御力	.28***	.53***	.33***	.41***	.52***	—
⑦他者関係	.33***	.28***	.47***	.44***	.27***	.40***

\*\*\*  $p < .001$

目標不屈追求および目標柔軟調整と5次元の心理的 Well-being との関係

目標不屈追求および目標柔軟調整と心理的 Well-Being 5次元 (人格的成長・人生の目的・自己受容・環境制御力・他者関係) との関係を明らかにするために、Figure. 1の因果モデルに基づき、共分散構造分析を行った。

まず因果モデルの設定に関して、外生変数として目標不屈追求の潜在変数および目標柔軟の潜在変数を、内生変数として心理的 Well-Being 5次元の潜在変数を設定した。次に、潜在変数の希釈化を避けるために、各潜在変数ごとに因子分析で寄与率の高かった上位3項目を観測変数として用いた。心理的 Well-Being の潜在変数に対応する観測変数をTable 4に示す。

共分散構造分析を行った結果、最も当てはまり

Table 4 心理的Well-Beingの潜在変数に対応する観測変数

潜在変数	観測変数
人格的成長	X 1 これからも、私はいろいろな面で成長し続けたいと思う
	X 2 新しいことに挑戦して、新たな自分を発見するのは楽しい
	X 3 私には、もう新しい経験や知識は必要ないと思う (R)
人生の目的	X 4 私は現在、目的なしにさまよっているような気がする (R)
	X 5 私の人生にはほとんど目的がなく、進むべき道を見出せない (R)
	X 6 本当に自分のやりたいことが何なのか、見出せない (R)
自己受容	X 7 私は自分の生き方や性格をそのまま受け入れることができる
	X 8 私は、自分自身が好きである
	X 9 良い面も悪い面も含め、自分自身のありのままの姿を受け入れることができる
環境制御力	X 10 私は、うまく周囲の環境に適応して、自分を生かすことができる
	X 11 状況をよりよくするために、周りに柔軟に対応することができる
	X 12 自分の周りで起こった問題に、柔軟に対応することができる
他者関係	X 13 私は、あたたかく信頼できる友人関係を築いている
	X 14 他者との親密な関係を維持するのは、面倒くさいことだと思う (R)
	X 15 私はこれまでに、あまり信頼できる人間関係を築いてこなかった (R)

注. (R)は逆転項目を表す

が良い Figure 2 で示したモデルを採用した。このモデルの適合度は、 $\chi^2(178)=419.28$ ,  $p<.001$ ,  $GFI=.88$ ,  $CFI=.89$ ,  $RMSEA=.06$ であり、モデルの標準化解はFigure 2に示した通りであった。結果より、目標不屈追求は、人格的成長への正の影響が最も強い ( $\beta=.66$ ) こと、人生の目的および他者関係へ弱いながらも正の影響がある (順に  $\beta=.21$ ;  $\beta=.20$ ) ことがわかった。自己受容および環境制御力への影響は見出されなかった。次に、目標柔軟調整は、環境制御力および自己受容への正の影響が最も強いこと (順に  $\beta=.83$ ;  $\beta=.78$ )、人生の目的および他者関係へも正の影響があること (順に  $\beta=.35$ ;  $\beta=.30$ ) がわかった。人格的成長への影響は見出されなかった。

討 論

本研究の主な目的は、目標不屈追求と目標柔軟調整が心理的健康に与える影響には、違いが見られるのかどうかを明らかにすることであった。そのため、目標不屈追求および目標柔軟調整と5次元の心理的 Well-Being との関係について、共分散構造分析を用いて検討を行った。その結果、目標不屈追求と目標柔軟調整のいずれも高いほど心理的 Well-Being が高いこと、さらに目標不屈追求と目標柔軟調整は心理的 Well-Being の異なる次元に影響していることが明らかとなった。

まず目標不屈追求に関して、人格的成長への正の影響が最も強いこと、人生の目的および他者関

係へも弱いながらも正の影響があることが見出された。目標不屈追求と人格成長の間に強い関連が見出された結果より、看護学校生にとって、看護の勉強で難しい出来事に直面しても諦めずに努力を注ぐことは、自分の成長を確認する機会となっていることが明らかとなった。看護学校のような専門学校では、資格取得に向け学生の進歩に合わせた課題を設定しており、学生はその課題を達成するごとに目標に近づくことができる。このような看護学校生の目標の特性が、努力を注ぐことと自己の成長や進歩を感じることを強く関連づけているのかもしれない。次に、目標不屈追求と人生の目的の間に弱い関連が見出されたことは、仮説1を支持するものであった。目標達成が困難な状況でも不屈に目標を追求することは、自らの人生の意味を問い直し、再評価する機会となっていることが考えられる。最後に、目標不屈追求と他者関係との結果より、看護学校生は目標に努力を注ぐほど、他者との連帯感を高めていることが明らかとなった。看護学校では、学習および実習の場面において、グループで活動を行なうことが多い。級友とともに目標達成を目指すという場面では、課題に努力を注ぐほど、他者との連帯感を高める効果があると考えられる。

次に目標柔軟調整に関して、環境制御力および自己受容への正の影響が最も強く、人生の目的および他者関係へも正の影響があることがわかった。目標柔軟調整と環境制御力および自己受容との結果は、仮説2を支持するものであった。目標達成が困難な状況において、状況の明るい面に目を向け、その中で効果的な方法を見つけ出そうとする傾向が高いほど、自己の良い面・悪い面を受け入れる傾向を促進し、さらに自分の周囲にある機会を効果的に使い複雑な状況をコントロールしている感覚を高めていることが示唆される。Brandtstädter & Renner (1990)は、目標柔軟調整の傾向が高いほど、自分が統制しているという感覚が高いことを見出しており、上記結果はこれと同じ方向を示すものである。目標柔軟調整と人生の意味および他者関係との結果より、困難な状況の明るい側面を見出したり、課題や手段の切り替えを行うことは、人生の意味を見出すことを促し、他者との連帯感も高めることが明らかとなった。

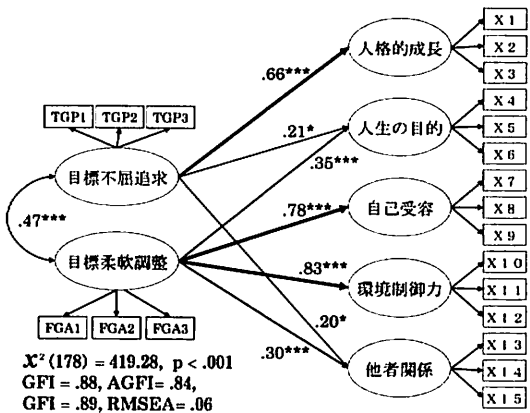


Figure 2 目標不屈追求および目標柔軟調整と5次元の心理的Well-Beingとの因果モデルの分析結果

まとめるなら、目標達成が困難な状況において、さらに努力を続けることは可能性にむけ成長し続ける自己を確認する効果があること、一方計画を変更し目標レベルを調整することは自己の良い面悪い面を受け入れるだけでなく、自分の周囲にある機会を効果的に使い複雑な状況をコントロールしているという感覚を高める効果があることが示唆された。看護学校生は、このような目標不屈追求と目標柔軟調整の対処を用いることで、心理的 Well-Being のそれぞれの次元を促進させ、看護師資格取得という難しい目標達成を乗り越えていることが示唆される。

ところで、目標不屈追求および人格的成長に関して、学年による差が見出されたこと、3年生は1・2年生より目標不屈追求および人格的成長を低く報告していることは、予想できない結果であった。調査を実施した時期は、1・2年生にとっては前学期の修業時であり、3年生にとっては看護実習という難しい課題を成し遂げた直後であった。看護実習では、一人の患者を担当し、自ら看護計画を立て、患者の看護にあたる。そして、実際の看護の場面では、患者との触れ合いを通して、自らの看護の限界を知ると共に、患者にそった看護をすることの大切さに気づくことが多いという(浅見, 2006)。このような実習体験が、周りの状況を考慮せず、ただひたすら目標に努力を注ぐという対処に、疑問を感じさせるようになったのかもしれない。Brandtstädter & Renner (1990)においても、年齢が高くなるほど目標不屈追求が低下することが報告されており、上記結果と同じ方向を示している。個人はさまざまな経験をすることで、単に努力を注ぐことが、効果的な対処ではないことに気づくのかもかもしれない。

本研究の限界 第1に、本研究はBrandtstädterと彼の同僚 (Brandtstädter & Rothermund, 1999; 2002) が提唱するモデル Dual Process Model を基に、対処を2つに分類し検討を行った。しかし、目標柔軟調整尺度はCronbachの $\alpha$ 係数の値が低く、信頼性の低い尺度であった。柔軟に目標を調整するという方略は複数の対処を含んでおり、単独の構成概念で測定することは適切ではないことが指摘されている (Azuma, 1984)。今後は、柔軟に目標を調整する対処について、さ

らに細かい分類を行い概念化した後に、再検討する必要があると考えられる。第2に、本研究は看護師資格取得という目標に特定しており、他の目標について検討していない。また、目標重要度の個人差について考慮した分析を行っていない。今後は、他の目標においても、同様の結果が得られるかどうか、検討する必要があるだろう。

#### 引用文献

- Aldwin, C.M., Sutton, K.J., Chiara, G., & Spiro, A. III. 1996 Age differences in stress, coping, and appraisal: Findings from the normative aging study. *Journal of Gerontology: Psychological Sciences*, 51B, 179-188
- 浅見昌子 2006 見失いたくない看護の原点：高齢者を看取る日々の中で思うこと 看護実践の科学, 31, 41-46.
- Azuma, H. 1984 Secondary control as a heterogeneous category. *American Psychologist*, 39, 970-971.
- Brandtstädter, J. & Renner, G. 1990 Tenacious goal pursuit and flexible goal adjustment. *Psychology and Aging*, 5, 58-67.
- Brandtstädter, J., & Rothermund, K. 1999 Intentional self-development: Exploring the interfaces between development, intentionality, and the self. In L.J.Crocket (Ed.), *Agency, Motivation, and the life course* (Nebraska Symposium on Motivation, Vol.48). Lincoln, NE: Univ. of Nebraska Press).
- Brandtstädter, J. & Rothermund, K. 2002 The life-course dynamics of goal pursuit and goal adjustment: A two-process framework. *Developmental Review*, 22, 117-150
- Heckhausen, J., Wrosch C., & Fleeson, W. 2001 Developmental regulation before and after a developmental deadline: The sample case of "biological clock" for childbearing. *Psychology and Aging*, 16, 400-413.
- 松岡弥玲. 2006. 理想自己の生涯発達：変化の意味と調節過程を捉える. 教育心理学研究, 54,



45-54.

Morling, B., & Evered, S. 2006. Secondary control reviewed and defined. *Psychological Bulletin*, 132, 269-296.

西田裕紀子 2000 成人女性の多様なライフスタイルと心理的well-beingに関する研究 教育心理学研究 48, 433-443.

Ryff, C.D. & Keyes, L.M. 1995 The structure of psychological well-being revisited. *Journal of Personality and Social Psychology*, 69, 719-727.

山本嘉一郎 1999. 共分散構造分析とその適用.  
山本嘉一郎・小野寺孝義（編）Amosによる共分散と解析事例（pp.1-22）. 京都：ナカニシヤ出版